



東京大学物性研究所での 大学院生教育と研究指導

Hiroshi MORITA 森田 浩 長光会, 元千葉大学教授

長倉先生は1959年に東京大学物性研究所分子部門の教授になられ、1981年に定年退官されるまでの22年間にわたり大学院生の教育と研究指導に携わった。私は1965年に大学院生として長倉研究室に入り、大学院修了後は職員(技官, 教務職員, 助手)として先生が定年退官され分子科学研究所の所長として岡崎に赴任するまでの長い間、研究指導していただいた。

先生の研究指導方針は明確であった。すなわち、研究者(大学院生も含む)自身の問題意識, アイデア, 独創性を尊重し研究の芽を育み発展させることを最優先とした。大学院生として研究を開始した直後は先生から研究テーマが与えられるが、研究を通して新しいテーマが見つかる先生はそれを遂行できるように積極的にサポートした。市販されていない新しい測定機器を研究室で製作したり、ほかの研究室の機器や施設を利用できるように手配したりして研究計画が実現できるようにサポートした。「走りだしたバスや電車に飛び乗るな」との戒めを再三話され、流行しているテーマに安易に飛びつかず、独創的な研究をするように指導した。日本の研究レベルを引き上げ世界に伍することを目指していた。また、院生や共同研究者が書いた投稿論文の原稿は毎回熱心に査読し、添削した赤インキでページ全体が赤く染まるほど、丁寧に修正して英語論文の書き方を院生に教えていた。こうして投稿論文が受理され別刷りが出版社から送られてくると、それらを世界中の関連する研究者に定期的に郵送し情報発信を継続的に行った。研究論文の評価を記した返信を受取ると、それを共同研究者である院生にも見せ、研究意欲の向上につなげていた。

レベルの高い研究集団を作り上げるため、研究室のセミナーは重要であった。先生は理化学研究所(理研)の「理論有機化学」研究室の主任を1961年から兼務していたため、理研と物性研究所のメンバーが合同で毎週月曜日にセミナーを開催した。大学院生や理研のメンバーが研究の進捗状況を説明し問題点や今後の研究方針を討論することが主体であったが、しばしばほかの大学や研究機関の先生方の講演や研究報告があり、また、頻繁に訪れる外国人研究者の講演を聞く機会でもあった。物性研究所がその当時、日本では唯一の共

同利用研究所であった利点を活かし、外国人研究者との交流も自然と深まっていった。

院生の研究発表は大学院教育の重要な柱であったため、研究室セミナーでは研究成果のほか、今後の研究展開に関する熱心な議論が行われた。先生は実験の失敗には寛容であり、努力している姿勢を評価した。その反面、良い結果が出ていても研究に消極的で否定的な態度には厳しく対処し、強く叱責することもあった。「研究者の風上にも置けない」という厳しい発言を聞くこともあり、その場合には院生のケアを皆で行った。

先生はご自身を厳しく律していた。それは大学卒業後の戦争体験で同世代の仲間が戦死したことへの無念さ、また、生き残された者としての使命感に根差していた。そのため明日を担う世代の育成にも熱心であった。

長倉先生が朝日賞(1971年)や日本学士院賞(1978年)をお受けになったときには「長倉先生を囲む会」が開かれた。在籍した研究室メンバーのほか、先生の初期の研究の共同研究者の方々、長倉先生が主催されていたパイ電子懇談会のメンバー、科学研究費の共同研究者の方々など幅広い人々に参集していただいた。先生が物性研究所を定年退官したときにも「長倉先生を囲む会」が開かれたが、このとき、物性研究所の分析化学部門におられた田村正平先生が、今後も末永く会が続くようにと「長光会」という呼称を提案され、それ以降、長光会という名前を使うようになった。

長倉先生は物性研究所で40名以上の大学院生の研究活動を指導し、修了生たちはそれぞれの場所(大学、国や民間の研究機関など)で教育や研究活動を続けてきた。院生時代に長倉先生の研究者としての矜持に触れることができ、研究室で切磋琢磨した経験を様々な場で生かすことができた我々は幸せであった。一昨年、久しぶりに昔の研究仲間と一緒に先生にお会いした。変わらぬ端正な所作で元気に話されていた。

このたびは、すでに鬼籍に入った門下生(茅幸二, 宇田川康男, 野上隆, 中垣良一, 折田秀夫, 家坂寛)諸氏が先生をお迎えし研究談義に花を咲かせていると思う。

深くご冥福をお祈りいたします。